

中国古代の「褱衣」に関する一試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 夏子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4355

中国古代の「禕衣」に関する一試論

学芸学部 化粧ファッション学科 水野 夏子

要旨：本研究では、中国古代における皇后の公服の中から、重要な祭祀に着用する「禕衣」に焦点をあて、その特徴を明らかにするとともに、日本における皇后の礼服への影響について探ることを目的とする。主に正史、経書などの文献史料と図像資料を用いて、「禕衣」の構成を整理・分析し、その変遷を辿ることから考察を行った。また、中国の「禕衣」と日本の皇后の礼服との比較・考察を試みた。中国における皇后の公服についての規定は周代より見られ、「禕衣」は天子の袞衣に相当する最高の祭服とされ、南北朝、隋、唐、宋、明代に受け継がれた。「禕衣」は、いずれにおいても第一の祭服に規定され、公服としての地位が一定しており、装飾文様の要素として五色の羽をもった雉が共通して用いられている。しかし、地色や文様の基調色・装飾技法・配置などに変化が見受けられた。平安時代、中国に倣い採用された日本の皇后の礼服には、唐制の「禕衣」の特徴が確認され、その構成は、宋代の皇后像の「禕衣」に等しいものではないかと考えられる。

キーワード：禕衣、皇后、公服、雉文、中国古代

はじめに

日本の服制は中国の服制に倣って採用されてきたが、皇后の礼服に関しては、不明な点が多いにもかかわらず、源流とされる中国古代の皇后の公服についての詳細な分析は行われていない¹⁾。中国側に焦点をあて、また中国の視点から追究することで、日本の皇后の礼服の考察を深める必要があると思われる。

本稿では、中国古代における皇后の公服の中から、重要な祭祀に着用された「禕衣」を取り上げ、その特徴を明らかにするとともに、日本の皇后の礼服への影響について探ることを目的とする。

研究方法には、主に国定史書である正史や儒学の經典である経書などの服制を記した文献史料、および図像資料を用いて、「禕衣」の構成を整理・分析し、中国古代に成立した「禕衣」の変遷を辿ることによって考察を行う。また、その上で中国の「禕衣」と日本で採用された皇后の礼服との比較・考察を試みる。

1. 周代の「禕衣」

中国において、皇后の公服についての規定が最初に見られるのは周代であり、『周礼』天官²⁾には、次のように記されている。

内司服、掌王后之六服、禕衣、揄狄、闕狄、鞠

衣、展衣、祿衣、素沙

このように王後の六服として、「禕衣」「揄狄」「闕狄」「鞠衣」「展衣」「祿衣」の6種が定められており、鄭玄の注では以下のように述べられている。

禕衣、画翬者、揄翟(揄狄)、画搖者、闕翟(闕狄)、刻而不画、此三者皆祭服、從王祭先王、則服禕衣、祭先公、則服揄翟(揄狄)、祭羣小祀、則服闕翟(闕狄)

つまり、王後の六服のうち「禕衣」は皇帝に準ずるものであり、先王を祭る時に着用する最高の祭服にあたる。『礼記』祭統³⁾にも、皇帝の袞衣に対応する公服として挙げられている。

君卷冕立于阼、夫人副禕立于東房

この「卷」とは袞衣の「袞」に通じるもので、皇帝は袞衣と冕冠、それに対応する皇后の公服は「禕衣」であり、「副」というのは頭飾を指している。

また、『周礼』天官の鄭玄注には、次のようにも述べられている。

以下推次其色、則闕狄赤、揄狄青、禕衣玄、婦人尚專一德、無所兼連、衣裳不異其色

ここから「禕衣」が黒地であり、衣と裳が繋がったワンピース式のものであることが確認できる。

素沙者、今之白縛也、六服皆袍制、以白縛(素沙)為裏、使之張顯、今世有沙縠者、名出于此

さらには、袍の形式をしており、裏地に白の紗が使われていることがわかる。また、『礼記』雜記「内子、以鞠衣、褕衣、素紗、下大夫、以禕衣、其余如士」⁴⁾の鄭玄注においても、「禕衣」が袍形式で、単衣ではなく、裏地に白の紗を用いていることが述べられている。

六服皆袍制、不禕、以素沙裏之

そして、『周礼』天官の鄭玄注には「禕衣、画翬者」つまり「禕衣」が「翬」を描いたものとあったが、以下に示すように『礼記』玉藻「王后禕衣、夫人揄狄」⁵⁾の鄭玄注によれば、「翬」は雉の名前であるという。

禕讀如翬、揄讀如搖、翬搖皆翟雉名也

加えて、『釈名』釈衣服⁶⁾には、次のように、「禕衣」が「翬」という種類の雉の文様を描いた衣服であると説明されている。

王后之上服曰禕衣、画翬雉之文于衣也

さらに『周礼』天官の鄭玄注では以下のように、その雉の文様が白地に五色を用いて描かれているものであることがわかる。

伊雉而南素質、五色皆備成章、曰翬、江淮而南青質、五色皆備成章、曰搖、王后之服、刻繪為之形而采画之、綴於衣以為文章

図1は、聶崇義撰『三礼図』に描かれている、当時の皇后の「禕衣」である。

「禕衣」は、その後の漢代、三国時代、晋代においては、服制には現れず、南北朝時代になって再び皇后の公服として規定されている。



図1 『三礼図』(聶崇義撰)に見られる「禕衣」
出典：『新定三礼図』上海古籍出版社 1985年

2. 南北朝時代の「禕衣」

『宋書』礼志⁷⁾には、「禕衣」について次のように記述されている。

今皇后謁廟服桂襪大衣、謂之禕衣

また『南齊書』輿服志⁸⁾にも、以下のように述べられている。

桂襪大衣、謂之禕衣、皇后謁廟所服

「禕衣」は宗廟に上がる際の最高の公服として定められている。その構成の特徴については不明であるが、別名「桂襪大衣」と呼ばれていたことがわかる。

3. 隋代の「禕衣」

続く隋代においても、「禕衣」は皇后の公服に規定されている。『隋書』礼儀志⁹⁾には、次のようである。

皇后服四等、有禕衣、鞠衣、青服、朱服、禕衣、深青質、織成領袖、文以翬翟、五采重行、十二等、首飾花十二鈿、小花毘十二樹、并兩博鬢、素紗内单、黼領、羅縠標、襪、色皆以朱、蔽膝随裳色、以緗為綠、用翟三章、大帶随衣裳、飾以朱綠之錦、青緣、革帶、青鞵、烏、烏以金飾、白玉佩、玄組、綬、章采尺寸同於乘輿、祭及朝会、凡大事皆服之

「禕衣」は皇后の公服の中で、最も重要な祭祀に着られるものとされており、周代とは異なる濃い青の地色になっているが、装飾文様には五色を用いた、周代と同じ「翬」と呼ばれる雉が施されている。ここでは文様の数が具体的に「十二等」と説明されている。

白の紗は、周代の「禕衣」では裏地として使われていたが、隋代では中着として用いられていることがわかる。ちなみに、中国の冠服において中着を着用するようになったのは漢代以降である。また、周代と同様、衣と裳が繋がったワンピース形式をしていることも読み取れる。

また隋代では、頭飾や髪型のほか、中着や蔽膝、帯類、履き物、綬などといった付属品に関し、その構成も含めて詳細に述べられており、それらすべてを合わせた一式で「禕衣」として捉えていることが窺える。

4. 唐代の「禕衣」

唐代においても引き続き、「禕衣」は最も地位の高い公服として規定されている。以下に示すように、『舊唐書』輿服志¹⁰⁾の記述によれば、隋代の「禕衣」をほぼそのまま受け継いでいることが明らかである。

武徳令、皇后服有禕衣、鞠衣、細釵礼衣三等、禕衣、首飾花十二樹、并兩博鬢、其衣以深青織成為之、文為翬翟之形、素質、五色、十二等、素紗中單、黼領、羅縠襟、襪、襟・襪皆用朱色也、蔽膝隨裳色、以縗為緣、用翟為章、三等、大帶、隨衣色、朱裏、紕其外、上以朱錦、下以綠錦、紐約用青組、以青衣、革帶、青襪、舄、舄加金飾、白玉双佩、玄組双大綬、章綵尺寸与乘輿同、受冊、助祭、朝会諸大事則服之

即ち、唐代の「禕衣」は濃い青地のもので、そこへ装飾される文様の要素は「翬」という雉であり、「十二等」施されている。頭飾や髪型、付属品の種類・構成も隋代とほぼ共通している。雉の文様については、白地に五色を用いて装飾されるものであることがわかる。

『新唐書』車服志¹¹⁾においては、次のように述べられている。

皇后之服三

禕衣者、受冊、助祭、朝会大事之服也、深青織成為之、画翬、赤質、五色、十二等、素紗中單、黼領、朱羅縠襟、襪、蔽膝隨裳色、以縗領為緣、用

翟為章、三等、青衣、革帶、大帶隨衣色、禕、紐約、佩、綬如天子、青鞵、舄加金飾

「禕衣」の地色、文様の要素と数、文様に五色が使われていることは同じであるが、文様の地色はここでは赤色になっている。

5. 宋代の「禕衣」

宋代においても変わらず、「禕衣」は最も重要な祭祀に着用される公服とされている。『宋史』輿服志¹²⁾には次のようにある。

后妃之服、一曰禕衣、二曰朱衣、三曰礼衣、四曰鞠衣、妃之縁、由翟為章、三等、大帶隨衣色、朱裏、紕其外、上以朱錦、下以綠錦、紐約用青組、革帶以青衣之、白玉双佩、黒組、双大綬、小綬三、間施玉環三、青襪、舄、舄加金飾、受冊、朝謁景靈宮服之

ここでは「禕衣」の付属品の一部とその構成が中心に述べられており、内容は唐代のものと同様であるが、「禕衣」そのものの特徴についてはほとんど触れられていない。

そこで画像資料として、国立故宮博物院南薰殿旧蔵の『歴代帝后像』に見られる宋代の皇后の画像（図2）を提示したい。この画像からは、宋代の「禕衣」



図2 宋代皇后の「禕衣」
(故宮博物院南薰殿旧蔵『歴代帝后像』)
出典：黄能馥・陳娟娟『中華歴代服飾芸術』
中国旅游出版社 1999年 p.258



図3 宋代皇后の「禕衣」
 (故宮博物院南薰殿旧蔵『歴代帝后像』)
 出典：黄能馥・陳娟娟『中華歴代服飾芸術』
 中国旅游出版社 1999年 p.259

が濃い青地であること、衣と裳が一続きになっていること、また文様には雉が使われ、その雉の文様というのは白地もしくは赤地のもので、その上に、五色かどうかはっきりとは確認できないが、さらに何色か色を施して装飾されたものであることが判断できる。

また、図3の皇后像の場合は、雉の文様の地色が赤色であることが認められる。やはり唐代の「禕衣」が引き継がれていることが窺える。

これら宋代の皇后像によると、隋代より「十二等」というように記されてきた雉文の数は、雉12羽ではなく、2羽を一組とし、それが12列にわたって配置されているということを示していると考えられる。『三礼図』も含め図像から考慮すれば、周代の頃と比べると、雉は1羽でなく1対で施されるようになっており、「禕衣」に施される文様の数が増加していることが読み取れる。

また、宋代の中期から後期に並立して建国された金王朝の『金史』輿服志¹³⁾を見てみると、次のように記されている。

皇后冠服、花株冠、用盛子一、青羅表、青絹襯金紅羅托裏、用九龍、四鳳(中略)上有金蟬鑽兩博鬢(中略)禕衣、深青羅織成翟翟之形、素質、十二等、領、標、襪並紅羅織成雲龍、中単以素青紗製、領織成鬪形十二、標、袖、襪織成雲龍、並織紅縠造、裳、八副、深青羅織成翟文六等、標、襪織成紅羅雲龍、明金帶腰、蔽膝、深青羅織成翟文

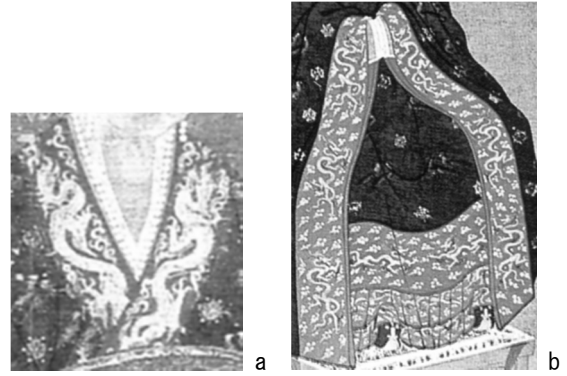


図4 宋代皇后の「禕衣」
 (故宮博物院南薰殿旧蔵『歴代帝后像』) 拡大図
 a: 襟部分 b: 袖口・裾の縁取り

三等、領縁、緞色羅織成雲龍(中略)小綬三色同大綬(中略)大帯、青羅朱裏、紕其外、上以朱錦、下以緑錦、紐約用青組(中略)青衣革帯、用縷金青羅裏造(中略)烏、以青羅製、白綾裏(中略)襪、青羅表裏

まずは頭飾や髪型、付属品の種類・構成がより豪華なものになっていることがわかる。「禕衣」には、濃い青地に、白地に五色で彩った雉の文様を12列施すということは同様であるが、ここでは雉の文様が彩色画ではなく、織りによって施されるものであると明示されている。また、羅の生地を用いていることも明記されている。さらに「禕衣」の襟や袖口、裾などの縁取りには、赤い羅を用い、雲龍文を織り出したものとなっている。これは、図2・図3の皇后像に見られる「禕衣」の構成と一致している(図4-a・b)。

6. 明代の「禕衣」

そして中国の服制において、「禕衣」が皇后の公服として最後に規定されていたのは、明代である。まず『明史』本紀¹⁴⁾には、次のように記されている。

(洪武元年二月)壬子、詔衣冠如唐制

洪武元年、太祖が「衣冠は唐制を採用する」と勅令を発している。そして以下に示すように、『明史』輿服志¹⁵⁾を見ると、「禕衣」は依然として最高位の祭服であり、濃い青地のものである。また赤地に五色で彩った雉文が12列に配置され、それは彩色画で装飾されたものであり、唐代の「禕衣」にそのまま倣っていることが認められる。また頭飾が唐代よりもやや豪華であること以外、付属品の種類や構成もすべて唐制に

戻っていることがわかる。

皇后冠服、洪武三年定、受冊、謁廟、朝会、服礼服、其冠圓匡、冒以翡翠、上飾九龍四鳳、大花十二樹、小花數如之、兩博鬢十三鈿、禕衣、深青繪翟、赤質、五色十二等、素紗中單、黻領、朱羅縠、標襪、蔽膝、隨衣色、以緞為領緣、用翟為章三等、大帶隨衣色、朱裏紕其外、上以朱錦、下以綠錦、紐約用青組、玉革帶、青襪、青舄、以金飾

7. 『西宮記』における皇后の礼服

以上のように、中国古代の「禕衣」の変遷を追ってきたが、日本の皇后の服制に対する影響として、以下に示す源高明撰の『西宮記』¹⁶⁾の記述が挙げられる。「禕衣」を採用したと考えられる、雉の文様を施した服が皇后の礼服として記されている。

皇后御服
鳩形(綵歟サ)紅色、青御服等

この頃、中国では唐代の後の五代十国時代にあたるが、五代十国時代は基本、唐の文化を継承した時代であり、『西宮記』に記された日本の皇后の礼服は、唐制の「禕衣」に倣ったものであると考えられる。前述のように、唐代の「禕衣」は濃い青地で、文様の雉は赤地に五色を用いて「十二等」施されている。『西宮記』に見える皇后の礼服も青い服であり、また、「紅色」というのは雉の文様の地色を示している可能性が考えられる。

おわりに

以上、中国古代における皇后の公服である「禕衣」は、周代より見られ、以後は南北朝、隋、唐、宋、明代に受け継がれている。

隋代以降は、様々な付属品を含んだ全体としての着装も「禕衣」と規定していることが窺えるが、いずれの時代も「禕衣」は第一の祭服に規定されており、公服としての地位は一定している。

また、一貫して衣と裳が繋がったワンピース形式をとり、文様の要素も、周代に使われている五色の羽を持った雉を継続して用いている。

「禕衣」の地色は、周代では黒であったが、隋、唐、宋、明代では濃い青となっている。

雉文の地色については、周代と隋代では白、唐代では白と赤、宋代では白、明代では赤となっている。

雉文の数や配置に関しては、図像資料によると、周代では1羽ずつで数羽施されていたが、隋代以降は数が大幅に増え、2羽が並列したものを1対として12列にわたり配置されていることが考えられる。

また、宋代においてのみ、製織で文様を施すことが行われ、さらに「禕衣」の縁取りすべてに文様（雲龍文）が加えられた華美なもので、他の時代と比べると、装飾的になっている。

『西宮記』に見られる日本の皇后の礼服の構成には、唐制の「禕衣」を取り入れていると考えられるが、それは周代より受け継がれ発展してきたものであり、具体的には生地の色（青）と文様の要素（雉）そして文様の地色（赤）という点を採用しているといえよう。また宋代の「禕衣」は、装飾的なものではあるが、付属品などとの共通性をふまえると、その構成はあくまでも唐代の「禕衣」がベースであることが十分に考慮できることから、平安時代の皇后の礼服の様相は、『歴代帝后像』に描かれた、宋代の皇后が着用している「禕衣」に共通するものではないかと推察される。

本稿は、日本家政学会関西支部第34回（通算90回）研究発表会（2012年10月 於奈良女子大学）における口頭発表の内容に加筆・修正したものである。

注

- 1) 中国の皇后の公服について個々に詳細な分析を行ってはいないが、各種礼装における日中関係に言及している代表的な先行研究に、以下のものが挙げられる。
 - ・増田美子『古代服飾の研究—縄文から奈良時代—』、源流社、1995年
 - ・武田佐知子、津田大輔『礼服 天皇即位儀礼や元旦の儀の花の装い』、大阪大学出版会、2016年
- 2) 『周礼』卷二 天官 家宰下。藝文印書館本。
- 3) 『礼記』祭統 第二十五。漢文大系本（富山房）。
- 4) 『礼記』雜記上 第二十。漢文大系本（富山房）。
- 5) 『礼記』玉藻 第十三。漢文大系本（富山房）。
- 6) 『釈名』釈衣服 第十六。王先謙撰『釈名疏証補』（上海古籍出版社、1984年）。
- 7) 『宋書』卷十八 志第八 礼五。藝文印書館本。
- 8) 『南齊書』卷十七 志第九 輿服。中華書局本。
- 9) 『隋書』卷十二 志第七 礼儀七。中華書局本。
- 10) 『舊唐書』卷四十五 志第二十五 輿服。中華書局本。

- 11) 『新唐書』卷二十四 志第十四 車服。中華書局本。
- 12) 『宋史』卷一百五十一 輿服志第一百四 輿服。中華書局本。
- 13) 『金史』卷四十三 志第二十四 輿服中。中華書局本。
- 14) 『明史』卷二 本紀第二 太祖二。中華書局本。
- 15) 『明史』卷六十六 志第四十二 輿服二。中華書局本。
- 16) 『西宮記』卷十九 臨時八 天皇即位。故実叢書本 (明治図書)。

Study on “*hui yi* (禕衣)” of Ancient China

Faculty of Liberal Arts, Department of Beauty and Fashion Studies
Natsuko MIZUNO

Abstract

The aim of this study is to focus on “*hui yi* (禕衣)” in formal dresses of ancient Chinese Empress, and to find the influence on formal dresses of Japanese Empress, explaining the feature of “*hui yi* (禕衣)”. Using the literature data and picture data, I analyzed the structure of successive “*hui yi* (禕衣)” and studied the transition of “*hui yi* (禕衣)”. I also compared Chinese “*hui yi* (禕衣)” with formal dresses of Japanese Empress. The regulation of formal dresses of Chinese Empress had been found since Zhou period, and “*hui yi* (禕衣)” was considered the best formal dress and was succeeded to the period of northern and southern dynasties, Sui, Tang, Sung and Ming. For the motif, pheasant design was used in common. But it had been changed in color, technique of decoration and arrangement. The feature of “*hui yi* (禕衣)” in Tang style was found in the formal dresses of Japanese Empress in Heian period. It was considered that the structure of it was the same “*hui yi* (禕衣)” as the statue of Empress in Sung period wore.

Keywords: *hui yi* (禕衣), Empress, formal dresses, pheasant design, ancient China